児童の社会的な用語についての調査研究

ー「つとめ」と「げっきゅう」についてー

目　次

Ⅰ　研究目的 …… 1

Ⅱ　研究方法 …… 5
1.　第1次調査 …… 5
2.　第2次調査 …… 5

Ⅲ　調査結果および考察 …… 6
1.　第1次調査の結果および考察 …… 6
(1)　「つとめにいく人というのは，どういう人のことですか。」「つとめにいく人のほかに，どういう人がいますか。」について …… 6
(2)　「げっきゅうをもらう人というのは，どういう人のことですか。」「げっきゅうをもらう人のほかに，どういう人がいますか。」について …… 15
2.　第2次調査の結果および考察 …… 21
(1)　「かいしゃ」について …… 21
(2)　「げっきゅう」について …… 25

あとがき …… 28

参考文献 …… 30

I 研究目的

(1) 社会科の問題は，論じられることが多くて，実際の児童の認識の実態やその発達の具体的な姿はほとんど明らかにされていないのが実情ではないかと反省している。また，社会事象の本質的な意味は握の指導とか，社会認識の指導過程とかいうことが，しばしば研究の主題になり実践もされたきたが，はたして児童が，正しい認識を得ることができたかどうか。このことは，多分に主観的な評価におちいったままで終わっているようにも思われる。

一方，目標の構造化とか，内容の精選とかいうことが問題になってひさしいが，依然として指導内容にはあいまいな点が多く，その系統，発展的な段階もかならずしも明確ではない。したがって，児童の認識もあいまいなものになってしまっている点があるのではないかと思われる。教科書も，少し時間をかけて分析してみると，この点は，思いのほか整理されないままであることに気づくことがあるのである。また，そこに使用されている用語・ことばは，その性質上やむを得ない面もあるが，かなり抽象度の高いものもあって，はたして，児童が，その意味内容をじゅうぶんくみとることができるかどうか，あやぶまれるものがあるように思われる。

そこで，この調査研究では，「つとめにいく人」「つとめにいく人のほかの人」「げっきゅうをもらう人」「げっきゅうをもらう人のほかの人」「近くの市，町，村や遠い地方とのむすびつき」「ほかの土地の産業とのむすびつき」「県の政治や文化の中心」「いくつかの県の中心となるはたらき」などの用語・ことばを，児童がどのように認識しているか，実態調査を通して明らかにし，指導の反省と改善の資としたいと考えたのである。

ただし，ここでは，紙数の制約があるので，「つとめ」と「げっきゅう」の二者についてしか掲載することができないので，あらかじめ了承をいただきたい。

(2) ここに掲載する「つとめにいく人」「つとめにいく人のほかの人」「げっきゅうをもらう人」「げっきゅうをもらう人のほかの人」— これらのことは，小学1年の単元『おうちの人たち』とか『おとうさんのしごと』とかで，1年のときから学習することといえる。しかし，たとえば，「おとうさんのしごと」でも，「つとめにいく人」とか，「うちでしごとをする人」とか，「田畑，海，山でしごとをする人」とかの区別がつけられていず，なんとはなしに，「つとめにいく」おとうさんが，おとうさんの典型的な姿のように取り扱われている場合がないわけではない。この点のあいまいさが，どのように児童の認識に影響を及ぼしているか。

このことと関連して，「つとめにくい人」の多くは，「げっきゅうをもらう人」でもあるわけであるが，このことの認識はどのようであるか。このことがあいまいであると，たとえば，2年のいろいろな職業に従事する人々の理解で，「田畑ではたらく人」の仕事の様子の特色を理解させようとするようなとき，じゅうぶんに理解させることができなくなってくるように思われるのである。「田畑ではたらく人」の仕事が，自然の影響を受けやすい仕事であるという特性は，「げっきゅうをもらう人」ではないという，経済的な面からの理解があって，はじめて認識されてくると思うのである。

しかも，「つとめ」とか「げっきゅう」とかいうことばは，学習以前の日常生活経験のなかでも，しばしば用いられ，耳にしていることばであるが，いったいどのように認識されているものであるか。

ひるがえって，これらの経済的な認識は，はたして，どの学年で，どの程度まで認識されるものであるかという認識の限界というものも問われなければならないであろうと思う。

(3) ちなみに，教科書および指導計画では，この「つとめ」や「げっきゅう」について，どのような取り扱いをしているかを調べてみると，およそ次のようである。

① 「つとめ」について

a 新潟市内小学校使用教科書では，3年第2単元『市や村の人びとのしごと』で，「つとめ」ということばが初めて出てくる。

ア まず，導入の部分に，「わたしたちのまわりには，店ではたらく人，工場にはたらきにいく人，役所につとめている人，のうぎょうをしている人，山ではたらいている人，海ではたらいている人など，いろいろなしょくぎょうの人がいます。」とある。

イ そして，<㈠ 市の人のしごと しょくぎょうしらべ>に，「わたしたちの学校は，市のなかほどにあります。しょう店のしごとをしている家がいちばん多くて，組の三分の一もあります。そのつぎに多いのは，工場につとめている家です。会社，役所につとめている家もあります。」とある。前には，工場は，工場にはたらきにいく人となっていた。しかも，この文章に添えられている<組の人の家のしょくぎょう>というグラフでは，しょう店のしごと，工場のしごと，つとめ，田畑のしごと，そのほかという分類になっているのである。

ウ <工場のしごと>の説明では，終わりに次のように記述されている。「どの工場も，朝はきまったじこくにはじまり，夕方きまったじこくにおわります。しごとがおわると，みんないっせいに門を出てうちへかえります。」

エ また，その後の<いろいろなつとめ>には，次のようにも記述されている。「わたしたちは，工場やしょう店のほかに，どんなところへつとめている人がいるか，しらべてみました。」ここでは工場で働く人も，商店で働く人も「つとめ」ている人と読みとれるようである。

オ さらに，この<いろいろなつとめ>には，つづけて，「わたしたちの市には，会社，ぎんこう役所などではたらいている人や，びょういん，鉄道，学校などにつとめている人など，たくさんいます。なかには，ちかくの大きな都会やとなりの市などにかよって，しごとをしている人もいます。」とある。そして，そこに添えられている<いろいろなつとめ>というさし絵には，（学校でおしえる）と注釈のある教師の絵，（びょういんのしごと）をしている医師の絵，（交通のしごと）をしているバスガールの絵，（じむをとる）人の絵，（タイプをうつ）人の絵がある。ここでは，「つとめ」と「はたらく」と「しごと」とが同義に使われているかのようでもある。

カ なお，「つとめ」ている人の仕事の機能としては，「つとめの人たちは，朝から夕がたまで，きまった時間はたらきます。」ということが規定され，「会社，役所などでは，かかりの人が，ちょうめんをつけたり，そうだんをしたりして，いそがしくはたらいています。」ということが強調されている。

キ　3年第3単元『市や村の人びとのくらし』では，「(二) 都会の人のくらし」に，次のような記述がみえている。「こうがいのじゅうたく地には，町のなかの会社や工場につとめている人が，たくさんすんでいます。そこから，電車やバスで，一時間はんも二時間もかかって，かよっている人もいます。」

ク　4年になると，第1単元『駅とあたらしい道』「(一) 市の駅」で，次のような記述がある。「わたしたちは，駅にいって，どんな人がれっ車をりようしているか，ききました。いちばん多いのは役所，会社などにつとめる人たちや工場ではたらく人たちです。」

ケ　5年では，第5単元『はってんする工業』「(四) 工場で働く人」で，「工場で働く人たちは，工場にやとわれてその工場の機械や材料を使って品物を生産します。やとい主は，働く人に賃金をはらい，作った品物を売って，りえきをうるのです。働く人たちは，その賃金で，じぶんや家族の生活をたてています。」と述べている。

b　新潟市小学校教育研究協議会社会科部会作製の『社会科指導№4』では，次のようである。

ア　1年第7単元『おうちの人たちのしごと』で，「1　お家で自分たちの世話をしてくれるのは誰か話し合う。」「2　おかあさんのする仕事を調べる。」のあと，次のように計画されている。

学　習　活　動	学　習　内　容	留　意　点
3おとうさんの仕事について調べる（3時間） oおとうさんの仕事を話しあう ・いつころ出かけ，いつころ帰るか話しあう ・出かけている間，何をしているか話しあう oおとうさんの仕事とおかあさんの仕事のちがうところを話しあう。 ・どこで ・どんな仕事を ・何のためにするか話しあう oお店や農家などで仕事をしているおとうさんの仕事を調べる ・どんな仕事をしているか話しあう ・忙しいのはいつか話しあう	5仕事には，家族の生活をささえるもとになる仕事と，生活の世話をする仕事がある 6つとめに出て仕事をするのは，家族の生活をささえるためである 7おとうさんたちの仕事には，時期によって忙しさのちがうものがある ・つとめ人 — 期末 ・お店 — 月末，期末 ・農家 — 田植え，収穫期 など 8世の中には，いろいろの職業がある	・つとめに出て働くわけについて，安易な「お金をもうけるため」というのではなく，家計と結びつけて取扱う ・（以下略）

おとうさんの仕事として，「つとめ」ているおとうさんが，何のためらいもなく，まずその典型的な姿であるかのように取りあげられている。この「つとめ」ているおとうさんについて話しあってい

る間，「つとめ」ていないおとうさんの家の児童は，どのようにして学習をしているのであろうか。また，「つとめ」ているおとうさんの家の児童でも，これらの学習に適格に反応するであろうか。一般化をはかることができるであろうか。その授業の実際では，なんらかの混乱が起こっているのではないかと推測する。

イ　3年第1単元『わたしたちの町』では，次にようになっている。

学　習　活　動	学　習　内　容	留　意　点
1クラスの人の，家の職業について話しあう（1時間） ・2年生で学習したことについて話しあう ・クラスの家の職業しらべ ・自宅でしている職業と勤めに分ける ・勤め先の附近のようすで知っていることを話しあう	1人々の職業にはいろいろあり働く所もちがっている	・3年の全単元の導入でもあり，2年での，人々の仕事の学習から町のようすに目を向けるようにさせる ・職業しらべについては，職業に貴賤を感ずるような取扱いにならぬようにする ・勤め先の土地のようすから身近な校区は，どんなところか関心を向けさせる

1時間という限られた時間に，どのようにして職業調べをするのか，その分類基準はどのようであるのかなどは，具体的に示してないから，各担任教師に任せられているであろう。しかも，留意点にあるように，主眼はほかのところにあって，職業調べは軽く取り扱われるようである。

ウ　4年第1単元『新潟市と町や村のつながり』では，次のようである。

学　習　活　動	学　習　内　容	留　意　点
1どうして新潟駅にはたくさんの人が乗り降りするか話し合う（1時間） ・この人たちは何をしに来る人たちか考える ・1日平均どのくらいの乗降者があるかしらべる ・通勤や通学をする人たちについてしらべる	1新潟市へは，ほかの市や町や村から多くの人が通勤や通学諸施設の利用などのためにやってくる ・工場，会社，県庁，デパート，商店，映画館，高校，大学，病院など諸施設	・導入であるから，かるく扱ってよいし，3年生の時のものを取りあげるようにする。㊀　万代橋と新潟港

工場，会社などへ，遠くから鉄道を利用して通勤してくる人のあることを学習する。

② 「げっきゅう」について

a　教科書には，「げっきゅう」ということばは出てこない。ただ，5年に，①でも掲載したように

「賃金」ということばが出てくる。「やとい主は，働く人に賃金をはらい，作った品物を売って，りえきをうるのです。働く人たちは，その賃金で，じぶんや家族の生活をたてています。」

b　指導計画でも，5年単元『工業とわたしたちの生活』で次のようになっているだけである。「工業生産に従事している人々は，第一次産業と大きな差違があり，生活の向上や設備の改善など問題がある。・賃金問題　・働く人々の生活」

しかし，前述のように，1年のときから，その授業の実際の中では，なんらかの形で，社会科といわず，他の教科等においてでも，「げっきゅう」ということばは，児童や教師から出され，取り扱われているものと思われる。

Ⅱ　研　究　方　法

1　第1次調査

(1)　次の問題を調査用紙によって自由記述させた。集計やまとめが煩さであり，主観のはいる危険のあることを承知の上で，自由記述の方法をとったのは，選択肢を用いた問題などでは，問題作製に困難がある上，どうしても児童のありのままの姿をつかみにくいと考えたからである。調査時間は45分。

① つとめにいく人というのは，どういう人のことですか。

② つとめにいく人のほかに，どういう人がいますか。

③ げっきゅうをもらう人というのは，どういう人のことですか。

④ げっきゅうをもらう人のほかに，どういう人がいますか。

(2)　調査の対象は，新潟市内のA小学校1年から6年までの全校児童約630人。

学年	1	2	3	4	5	6	計
人数	109	91	94	110	105	118	627

（注）実施時の欠席者を含めない。

なお，A校は，新潟市旧市内にあり，学校概覧によれば，父兄の職業構成は次のようである。

公 — 93　工 — 109　商 — 93　水産 — 6　労 — 96

その他 — 243　無 — 12　（注）数字は児童数。

(3)　調査実施期間は，およそ11月上旬から中旬にかけて。各学級適宜行なわれた。なお，調査は，各学級担任に依頼し，児童の質問には一切応じないようにお願いした。

2　第2次調査

(1)　第1次調査の結果，追跡調査の必要を認めたので，さらに，次の問題を調査用紙によって自由記述させた。調査項目は，11項目であるが，ここには，紙数の制約上，第1次調査に特に関連の深い次の2項目を掲載することにする。

つぎのそれぞれのことについて　どういうことか　せつめいしなさい。

① かいしゃ　　② げっきゅう

(2) 調査の対象は，第1次調査と同一校で，1年から6年までの全校児童。

学年	1	2	3	4	5	6	計
人数	108	90	90	110	103	118	619

（注）実施時の欠席者を含めない。

(3) 調査実施日は，2月上旬のある一日。全校一斉に行なわれた。これは，A校の取りはからいによるもので，調査の内容や性質とは無関係である。なお，調査は，各学級担任に依頼し，児童の質問には応じないように配慮していただいたことなどは，第1次調査同様である。調査時間は，45分。

Ⅲ　調査結果および考察

1　第1次調査の結果および考察

(1)「つとめにいく人というのは，どういう人のことですか。」「つとめにいく人のほかに，どういう人がいますか。」について

この二つのことは，表裏の関係にあるので，同時に取り扱っていきたい。この二つのことについて，各学年児童の認識の実態を例示し，その考察を加えてみると，次のようである。「つとめにいく人」については，自分の家から役所，会社など，どこかへ働きにいくこと，そこで一定時間働くこと，働いて報酬を得ることなどを，いちおうの目やすとし，「そのほかの人」については，商業，農業，漁業，林業などに従事する人を目やすとすることにした。なお，例は，ある児童の回答例を現わし，すべて原文のままである。人数は，ひとりでいくつもの項目にまたがる場合があるので，複数回答とした。（以下，本稿の数字は，すべて同様である。）

＜1年＞

① 「つとめにいく人というのは，どういう人のことですか。」

このことについての1年の児童の回答の特長は，ひとくちにいって不得要領である。もちろん，回答なしも多い。それを，あえて分類すると，およそ次のようになる。

a　「つとめ」ということを「しごと」と理解し，いろいろの職業をあげているものが多い。27人／109人（注・109人中27人，以下同様）

例1：けいさつ，ほんや，しゅうじや，そろばんや，ぱちんこや，ぶんぼうぐや，ぷらもでるや。

例2：かんごく（注・かんごふ），おかしや，ほんや。

b　「はたらく人のこと」「しごとをする人」のように，ことばを置きかえているもの。14／109

c　「はたらいている」のは，「おとな」であるという現象から，「おとなの人」ということばに置きかえているもの。6／109

d　「おとなの人」つまりは，自分の家の「おとうさん」であり「おかあさん」であるということか

ら，端的に，「おとうさん，おかあさん」としているもの。10／109

e　「家」以外の「どこか」へ働きにいくという認識は少ない。しかも，あいまいなものを含んでいる。6／109

例1：おみせやさんじゃない人，なんにもうちにしてない人。

例2：まい日つとめにいく。

例3：こうばでじどうしゃやいろいろなものをつくるひと。

f　「どこか」へ働きにいくこととしているもののなかには，「かいしゃ」へ働きにいくとしているものが目だつ。「つとめ」すなわち「かいしゃ」である。しかし，その「かいしゃ」の概念も，非常にあいまいなもののようである。9／109

例1：かいしゃにつとめている人。

例2：かいしゃにはたらきにいくことです。

例3：せるすます（注・セールスマン），かいしゃにつとめている人。

g　労働時間に対する関心は生まれていない。

h　「おかね」とか「げっきゅう」とかいうことばは出ているが，賃金，給料などについての認識が生まれていると考えるのは早計である。なぜなら，たとえば，「げっきゅうをもらうおとうさん」と答えている児童が，「げっきゅうとは」の問いに「しゃちょう」と答えたり，「げっきゅうとり，ようふくやさん」などと答えたりしている具合だからである。4／109

例1：はたらいておかねをもらう。

例2：げっきゅうをもらうおとうさん。

i　その他

例1：おかねがいっぱいほしい人。

例2：びんぼうな人。

例3：しっかり子どものうちにべんきょうをしているひとです。

例4：よくしごとをする人。

例5：いそがしい人。

②「つとめにいく人のほかに，どういう人がいますか。」

「つとめにいく人」の裏返しであるから，その認識の特長は，やはり，不得要領というべきであろう。

a　いろいろの職業が，①と②の区別なく列挙されたりしている例が多い。また，①と②が，かならずしも対応しない例もある。28／109

例1：がっこうの先生，はたらいている人。

例2：ばすのしゃしょうさんとさらりいまんの人，くるまをなおす人やいろいろなひとがいます。

例3：かいしゃのひと，だいくさん，つとめているひと。

例4：①で「かいしゃへいくひと」と答えていて，②では，「はたらきにいく」と答えている。

例5：①では，「ばすのつとめ，こうじばのつとめ，おまわりのつとめ，おとうさんのつと

め，がっこうのつとめ」をあげ，②では，「おとうさん，おかあさん，おにいさん，おじさん」などと答えている。

b　「つとめている人」をあやまってあげているもののなかには，「せんせい」が多い。7／109 つぎに「うんてんしゅ，しゃしょう」6／109 かいしゃの人4／109 などである。

例1：おひゃくしょうさん，おいしゃさん，がっこうのせんせい。

例2：がっこうのせんせい，おいしゃさん，おみせやさん。

c　全体としてみれば，不得要領な回答であるが，正答は，「つとめにいく人」の場合よりはるかに多い。それは，「つとめにいく人」のイメージより，その他の人のイメージが，生活経験の上からも，えがきやすいためではなかろうか。「つとめ」ということばは同じでも，「つとめにいく人」という語感に抵抗があるのかもしれない。そして，その正答の特長は，具体的な職業名などをあげることである。ことに，各種商店をあげるものが多い。紙面の許す限り２０種もあげているものがある。しかし，これらの正答の中にも「つとめ」がまじり，あいまいさは，おおいきれない。50／109

例1：うちではたらいている人もいます。だいくさんもいます。うちではあまやさんをやっている人もいます。ほんやさんもいます。

例2：うちでなにかしごとをすること，うちではたらくひと。

例3：じぶんのうちにしごとがあるおとうさん。

d　田畑で働く人などをあげるものは少ない。6／109

例1：はたけをつくっている人，だいくさん，おみせやさん。

例2：うちではたらく人，さかなをつってうっておかねをもらう。

例3：おひゃくしょうさん，おいしゃさん，がっこうのせんせい。

＜2年＞

①「つとめにいく人というのは，どういう人のことですか。」

ようやく，家から出て「どこか」へ働きにいくという考えが出てくる。

a　しかし，その回答は，「かいしゃ」とか，「こうば」とかいうような断片的，具体的であって，まとまった，一般的な表現にならないものが多い。25／91

b　なかには，かなりまとまった表現もないわけではない。12／91　これらの児童の中には，自分の身近に会社の事務所などがあって，直接見聞しているものもあるのではなかろうか。また，マスコミとりわけテレビなどの影響も強いのではなかろうか。その様相が，非常に具体的に描写されている場合があるのである。

例1：あさつとめにいっておしごとをしてかえります。おかねは，1か月にいっかいしかもらいません。ただ，じをかいているだけでなく，どこかへいったりします。しゃちょうは，くるまをもっているとおもいます。

例2：あさ，つとめにいく。しごとをする。べるまたはちゃいむでおわらせたりする。おひるごはんをたべてきゅうけいする。おひるやすみは，ボールなげ，あるいはまた，うたをうたったりあみものをする。そして，また，ちゃいむやべるでしごとをする。5

時ごろまでしごとをしてうちへかえる。

c 「つとめ」 ― 「かいしゃ」の観念は，1年よりますます強く，「つとめ」―「かいしゃ」 ―「じむいん」，そして，ホワイトカラーに結びつく。30／91

例1：かいしゃで，かみかノートに字をかいたり，ぐらふをかいたり，えをかいたり，だれかとはなしをしたりする人。

例2：男や女のいくところです。はんさむな人がいくところです。そして，きれいなふくをきていくところであります。

例3：はんをおしたり，人におちゃをだしたりしています。

d また，「つとめ」 ― 「かいしゃ」 ― そこで働く人は，どんな資質をもっていなければならないかという観点から述べるものもある。5／91

例1：えらい人，はたらく人，いい人，あたまがいい人。

e 「つとめ」＝「はたらく」の考えも，1年に引き続き残っているが，非常に少なくなっている。この考えのものは，働いている人を「つとめ」と無関係にあげている。6／91

例1：おまわりさん，ばんや，ぎんこう，おかしや，くつや，だいくさん，こうちょうせんせい，てれびや，うんてんし，でんきやさん，でんしゃのおじさん，ぷらもでるや，こうばのおじさん，せかいじゅうでえらい人。

f 労働時間に着目するものがでてくる。5／91

例1：あさからよるまでつとめのしごとをしてくる人のこと。

g 働いて報酬を得るという考えに及んでいるものは，1年よりはるかに多くなる。13／91

例1：つとめにいく人というのは，かいしゃのべんきょうにいくことです。えきのつとめにいく人は，でんしゃをうごかしたり，きしゃをそうじしたりします。じどうしゃのこうばでつとめるのは，じどうしゃをつくるためです。だけど，まだ，つとめているのは，どうしてかは，おかねがくるからです。どうしてつとめるといいかは，はたらくとおかねがくるから，ほとんどつとめにいきます。

② 「つとめにいく人のほかに，どういう人がいますか。」

a 正答は，非常に多くなる。多少のあいまいさは，なお残っている。

例1：じぶんのうちではたらく人，だいくさん，えきの人，デパートの人，パーマの人，じてんしゃの人，本や，がっこうの先生，ぶんぽうぐや，おかしや。

例2：①で「つとめにいく人というのは，もし，かいしゃにつとめる人だったら，かいしゃにいくということです。」と答えていて，②では，「げっきゅうをもらう人もいます。みせやさんもいて，あぶらやさんもいます。そして，じどうしゃをなおすこうばにもいっています。」のように答えているものもある。

b 答えの傾向は，いろいろの商店を列挙するものが多く，2年の学習内容からして，田畑で働く人などの例がもう少し出されてくるかと予想していたが，これらをあげるものは依然として少ない。2／91

例1：みせではたらく人，うみではたらく人，おひゃくしょうさん，たいそうの人，小さなふねをこぐ人，しょうぼうしょの人，すみをつくる。

c　学校の先生，警察官などをあげるものが目立つ。11／91

＜3年＞

①「つとめにいく人というのは，どういう人のことですか。」

2年以上に，家で仕事をする人をいうのではないという考えが明確になってくる。

例1：こうじょうではたらく人やかいしゃにいく人のように，じぶんのうちは，ふつうのうちで，やおややみせではないいえの人。

例2：うちのしごとをしないで，かいしゃではたらいている人をいいます。しょうてんではたらいている人やデパートではたらいている人もいます。

a　「かいしゃ」「こうば」などで働く人という固定的な考え方は，依然として強い。「やくしょ」は，一例しかない。かいしゃ29／94　こうば2／94　かいしゃやこうば16／94

b　また，用語や表現のあいまいなものも残っている。4／94

例1：かいしゃにいく人，はたらきにいく人，会社の中ではたらく人。

例2：さらりいまんやかいしゃにいく人たち。

c　通勤の現象などに着目していうもの。2年でも数人あった。6／94

例1：まいあさ，はやくおきて家を出ていきます。

例2：家からかいしゃまでとおい。でんしゃにのるまでの時間。

d　つとめにいくことのできる人の条件や資質などの面でいうもの。2／94

例1：つとめにいく人は，まじめでなければだめです。こどもをそだてる人もいく。せいかつのためにいく人もいる。

e　報酬に関した答えは，ますます多い。しかし，このことに関連した学習内容は，3年では直接とりあげないので，児童の生活経験の中で，自然に芽生えてきたものと解釈すべきではなかろうか。15／94

例1：どこかのかいしゃや工場にいってはたらいて，じぶんの家がみせを出していようとでかけていってしごとをし，おきゅうりょうをもらってくる人。

例2：月ようから土よう日まで，まい日はたらいておかねをもらい，いえのためにはたらいている人

②「つとめにいく人のほかに，どういう人がいますか。」

a　2年同様，正答が多い。商店，医師などをあげるものが多く，田畑で働く人とか，海，山で働く人とかに目が向いていないことも同様である。2年で，これらの人々の生活について具体的に学習し，3年で，地域の人々の仕事調べなどをしているのであるが，町の子どもたちには，やはり，関心が薄いのであろうか。ただ，それだけの理由ではないと思われるが。田畑で働く人をあげたもの6／94　海で働く人4／94　山で働く人2／94

b　内職をあげるものが目だつのも，児童の現実的理解であろうか。6／94

例1：うちがみせやでうちではたらく人。きんじょのうちへてつだいにいく人。アルバイトをする人。こどものいっぱいいる人のところへいって，子どもをおかあさんがむかえ

にくるまでひきとっておく人。

例２：おかあさんは，いつもあみきをかりて，うちでふくをつくったりしておかねをもらってくる。かみところのおばさんは，いつもあそびにいくと，うちででんきのコードをつくっている。

c　「先生」などをここに入れているものが，なお少し見受けられる。4／94

＜4年＞

①「つとめにいく人というのは，どういう人のことですか。」

あいまいさは残っているが，いろいろな職業を列挙する例が少なくなり，ややまとまった描象的な表現に変わってくる。

a　3，4年の学習の成果であろうか，近く，あるいは遠くの町などへの通勤のことが取りあげられてくる。5／110

例１：朝，きまった時こくにじ分のつとめている所へいってしごとをする。それに，かいしゃのほかにもいろいろあります。そして，となりの県や町から来る人もいて，どうしても大切な時は，とまったりするときもあり，月きゅうをきまった日にもらう。

例２：それは，少し遠い所でも生活のために毎日はたらきにいって，きゅうりょうをもらいにいく。また，よその県へしゅっちょうしたりしなければならないこともある。それに，おしごとのつごうで，てんきんしなけりゃならないこともある。あたえられたしごとは，さいごまでせきにんをもってやらなければならない。

b　つとめ先を「かいしゃ」「こうば」としている固定的な観念は，なお強い。かいしゃ37／110　こうば1／110　かいしゃやこうば6／110

c　通勤などの現象に着目して表現しようとするものは，変わらずにある。このことは，見方を変えていえば，労働時間に着目しているともいえよう。ただ，「あさ出て，夕方かえる。」というのと，「きまった時間はたらく。」というのとでは，やはり異なる。前者は，より現象的理解であるといえるだろう。7／110

例１：朝家を出て夕方5時ごろ家にかえってくる。それから，ざんぎょうがあって家におそくかえってくるときもあります。

例２：なにかのしごとをしたり，そろばんで計算したり，かみにはんこをおしたり，それがあさからゆうがたまでつづいている。

d　報酬に関した答え。20／110

e　「つとめにいく」ということを道徳的に理解しているものが目につく。5／110

例１：一日一日なまけずいっしょうけんめいはたらいてお金をもらう人。

例２：やすまないではたらいている人。

②「つとめにいく人のほかに，どういう人がいますか。」

a　前学年同様，商店をあげるものが多い。また，「ないしょく」ということばも目につく。17／110　ほかに，田畑で働く人14／110　海で働く人8／110　山で働く人2／110

b 「先生」「かんごふ」「しょうぼうしょ」「けいさつ」などをここに入れるものが，引き続き目立つ。7／110

c アナウンサー，野球の選手，スチュアーデス，俳優などがあげられてくるのが特長的。11／110

＜5年＞

① 「つとめにいく人というのは，どういう人のことですか。」

「つとめ」＝「かいしゃ，こうば」という考えは割合い少なくなり，いろいろの職業をあげる傾向に変わってくる。会社15／105 工場0／105 会社や工場4／105

a しかし，あいまいさの残っていることはいうまでもない。

例1：つとめというのは，自分の家でしょう売をするのとちがって，よその会社，仕事場（工場）で働いている人で，自分が働いてお金をもらう人をつとめにいく人という。（工場員，バスの車しょう，うんてん手，サラリーマン，会社員，えいがやテレビはいゆう，先生など）

例2：つとめというのは，どこか働きにいく人のことをいうと思います。働きにいくとこはおもに工場などですが，そういうことをつとめにいく人というと思います。そういうのを出かせぎといいます。

b また，2年のときにみられた「つとめ」―「かいしゃ」―「ホワイトカラー」のイメージが5年になって再び顕著となる。10／105

例1：バスや電車に乗って会社へ行き，書るいをしらべたり，はんこうをおしたり，会議などに出たり，せったいをしたり，電話に出たりする。

例2：会社などの計算をしたり，作ったり，あつめたりするようなところは，できたせいさん高などをきにゅうしたりする。その会社のひつようなしょるいを作ったり，そのしょるいにいるじゅうやくなどのはんこうをもらったりしてくる。

c 道徳的なとらえかたをしているものも，かなり目につく。6／105

例1：先生のようにおしえたり，けいさつかんのように国をよくするためにはたらく人も人のためにやつだつ人，それをつとめるという。

例2：働いて，ただお金をもらうということだけでなく，人のためにつくすものであったりやくにたったりする。つくったものをつかってわたしたちの頭にはいる。つまり，どれにもやくにたつ。

d 労働時間にふれているもの。5／105

e 報酬に関するもの。27／105

② 「つとめにいく人のほかに，どういう人がいますか。」

a 農業，漁業などをあげるものが際立って多くなる。5年のいわゆる産業学習の成果とみてよいであろうか。農業37／105 漁業26／105 林業3／105

b 「先生」「警察官」などを「つとめにいく人」のほかにしていることは前学年同様である。9／105

c　画家，小説家など，いわゆる芸術家，芸能人をあげるものの多いことも前学年同様である。10／105

＜6年＞

①「つとめにいく人というのは，どういう人のことですか。」

この学年の特長は，5年との発達的な段階が，かならずしも明らかでないことである。むしろ，5年に比べ，全体として説明がきわめて簡略である。会社23／118　工場0／118　会社や工場6／118

a　あいまいさ，まとまりのなさは，依然として残る。

例1：ある会社などにお金をもらってはたらく。はたらく時間がみんな同じ。上の人とのちがいがはっきりしている。サラリーマン。人を使っている人のいうことをする。

例2：あまりさいのうのない人。力があって科学がすきでない人。つとめがすきな人。農業がすきでない人。漁魚がすきでない人。つとめ先がある人。

b　労働時間に関するもの。14／118

例1：家のくらしのために，毎日のくらしをしていくために，毎日毎日，出かけていって，朝から夕方まではたらいてお金をもらう。

例2：まいあさ，おとなで8じごろ家を出て工場や商てん，会社などにつとめていて，いっしょうけんめいはたらいて6時ごろかえって，やすむ日は休み，はたらく日ははたらいておかねをもらい，やめたい人は，また別の会社，そのほか，いろいろのところへまたつとめる人，そういう人がつとめ人。

c　報酬に関するもの。35／118

例1：自分で働き，働いた分だけのお金をもらえる人のことをいいます。それから，仕事をする場所で，ちゃんと仕事をする人（自分の家などをぬかした会社など）

例2：どんな人でも，はたらいてそれだけのしゅうにゅうをえる人。会社また自分のつとめているところではたらき，それだけのお金をもらう人。それがつとめにいく人。

d　「けいえい」とか「じぎょう」とかいうことばが使われだす。5／118

例1：はたらく，つまり自分が経営している会社でなく，人の下ではたらくこと。

例2：よそへはたらきにいくこと。自分でけいえいしていないところではたらく人や，上の人からめいれいされる人。たとえば，かいしゃにつとめている。

e　道徳的な説明。働いていることが，国のためになっているかというような観点からの価値的な判断がかなり働いている。4／118

例1：自分の道をはっきり決めた人。どんなつらいことがあっても，それに負けない人。自分のうけもちの仕事を責任をもって最後までやりとおす。

例2：会社へ決まった時こく，決められた時こくにきちんと出きんする人。一つのしごとをくいなく，いっしょうけんめいにする人。たとえ，いやなしごとでも，よいしごとでも，区別なくその仕事をしているとほこりをもっている人。つらいろうどうしごとのけいけんし，少しでも世の中に役にたとうと思っている人。

② 「つとめにいく人のほかに，どういう人がいますか。」

a　農業，漁業，林業などをあげるものが，5年よりはるかに少なくなる。農業17／118　漁業3／118　林業1／118

b　一方，「政治をする人」といった答が見えて，やはり，学習の成果がうかがわれる。5／118　芸術家，芸能人が意識されていることも前学年同様である。7／118

例1：商人，プロ野球のせんしゅ，農民，はいゆう，政治をする人。

例2：評論家，文びつ業者，政治家，家で働く（店をひらいている人たち）

例3：商売をしている人，農業をしている人，参議院など政治を行なう人，医者。

以上，その都度考察してきたことを，ここに全体としてまとめて簡単に述べると次のようになる。しかし，これらのことは，先述の数字にもみられるように，あくまでも，わずかな傾向性といえるものでしかない。

① 「つとめにいく人というのは，どういう人のことですか。」について

a　1年では，ほとんど回答の要領を得ない。しいて整理すれば，「つとめ」＝「しごと」と理解して，いろいろの職業を列挙しているもの，「つとめ」＝「しごとをする人，はたらく人」ということばの置きかえをしているもの，「つとめ」＝「かいしゃ」と観念的に理解しているものなどのあることが特長的である。

b　2年になると，「つとめにいく」というのは，「どこかへ働きにいく」ことであるという考えが出てくる。そして，その「どこか」は，「かいしゃ」「こうば」である。この固定的な観念は，4年まで続き，5年からは，割合いに少なくなる。

c　2年になると，「つとめ」――「かいしゃ」――「じむいん」という考えが，非常に強くあらわれるが，このことは，3，4年でそれほど目だたなくなり，5年で再び顕著となる。

d　2，3年では，つとめにいくことのできる人の資質や条件などの面から「つとめにいく人」を説明しようとするものがある。

e　労働時間などに目を向けているものは，各学年でわずかみられるが，6年でいくらか多くなる。

f　「つとめ」と報酬を結びつけているものは，学年をおって，順次段階的に多くなる。どこかに，飛躍するところというものはない。このことから，その増加は，児童の自然発生的な認識の発達と考えることができる。

g　通勤の現象面などから，「つとめ」を説明しようとするものは，4年ごろまでである。

h　「つとめ」ということも，道徳的な面から強く意識しているものが，4年から目につきだす。6年では，国のためというような価値的な表現も出てくる。

i　全体的にみて，5年から6年への発達的な段階が顕著でなく，むしろ，6年の方が，その説明などは粗雑なくらいである。

② 「つとめにいく人のほかに，どういう人がいますか。」について

a　①と②の問いかけは，表裏であるが，その反応は，かならずしも一致せず，1年児童の約半数までが，いろいろなあいまいさをふくみながらも，正しく回答しているのである。そして，2年以後にな

ると，ますます正答は増加する。児童は，「つとめにいく人」と問われるよりも，「そのほかの人」と問われるほうが答えやすいようである。「そのほかの人」のほうが，より身近であり，イメージをえがきやすいのであろうか。

b　しかし，「そのほかの人」としては，商店をあげるものが大部分であって，農業，漁魚，林業などに従事するものをあげるものは少ない。このことは，1年から4年まで，徐々に増加するが，5年では，際立って多くなり，6年になると，また減少する。

c　誤答の中で特長的なのは，各学年を通じて，「先生」「警察官」などである。これらの職業に従事するものは，「つとめにいく人」とは受けとられていないようである。

d　4年から，いわゆる芸術家，芸能人などが登場してくる。

このような実態のもとで，「つとめ」にいく人をどのように指導すべきであろうか。

指導要領，および，それにもとづく教科書や指導計画では，「つとめ」について指導できる場面は，前述のように，1年，3年，4年，5年にある。とりわけ，1年と3年にある。1年では，「おとうさんのしごと」として，直接これを学習の対象にする。3年では，「町の人のしごと」調べで，その職業分類などに取り扱う。

3年では，この調査によれば，いちおう，その素地ができつつあるようによみとれる。しかし，3年では，町の人々の職業分類から，その構成を通して，町の産業の特色をみようとする。産業の特色から町の様子の特色をみようとするところに意図がある。したがって，「つとめにいく人」を意図的に指導しようとすれば，1年でしておかなければならないことになる。

1年では，この調査によれば，ほとんど，その回答に要領を得ない。確かに，その実際になると，朝早くでかけて，夜遅く帰るということが障害になったり，どこかへ行ってはいるが，どこへ行っているかは，よくわからないということがあったり，会社へ行っていることはわかるが，どんな仕事をしているのか，その様子の実際を知ることができなかったりして，なっとくいくだけのじゅうぶんな認識を得させることは不可能のように思われる。それでは，1年では，「つとめ」ということを指導することは無理であろうか。2年からの調査結果をみたりすると，家でしごとをするか，家を出てつとめにいくかまた，田畑，海，山などで仕事をするかなどの区別は指導することができるように思うのである。またそれにともなう「おかね」の収得のしかたの違いも指導することができるように思う。そして，1年ではこの程度にとどめたいと考える。このように考えるならば，その後の学年の発展的な系統が当然問題になるが，ここでは，調査結果とその考察に主体をおき，そのことには及ばないことにしたいと思う。

(2)　「げっきゅうをもらう人というのは，どういう人のことですか。」「げっきゅうをもらう人のほかに，どういう人がいますか。」について

この二つのことについても，(1)同様，同時に取り扱い，児童の実態とその考察を加えていきたい。

なお，「げっきゅう」については，とうていそのメカニズムというようなものには及ぶべくもないし，また，その理解を期待すべきでもないので，いちおう，字義的に，「つとめに行って月ごとに給料を得る」ということを目やすにすることとした。

＜1年＞

① 「げっきゅうをもらう人というのは，どういう人のことですか。」

1年の児童の回答は，その目標にほど遠い。

例1：かいしゃにつとめているおとうさんのこと。

例2：おかねをもらうこと。

例3：まいにちつとめておかねをもらう人。

② 「げっきゅうをもらう人のほかに，どういう人がいますか。」

全体的にみて，①同様，回答の要領を得ない。しかし，「つとめ」のときのように，「げっきゅうをもらう人」よりも，「そのほかの人」のほうが正答が多い。児童は，「げっきゅうをもらう人」を，おぼろげながらでも，「つとめにいく人」と理解しているから，「そのほかの人」という問いには，「つとめにいく人」のほかの人をあげればよいと判断しているのであろう。そのおもなものは，次のようである。

いろいろなみせや31／109 とこや・だいくなど21／109 がっこうのせんせい7／109 バス・タクシーのうんてんしゅ・しゃしょう4／109 しゃちょう・ぶちょう・かちょう4／109 おかねもち4／109 びんぼう4／109 えらい人2／109

＜2年＞

① 「げっきゅうをもらう人というのは，どういう人のことですか。」

1年同様，不得要領である。

例1：つとめている人が，いっしょうけんめいにはたらいてげっきゅうをもらわれます。

例2：かいしゃ，こうじょうにいって，いっしょうけんめいにはたらくほどげっきゅうがあがる。そしてから，かちょうやぶちょうになるとますますあがる。

ただ，次の2例は，「月ごとに」というニュアンスをただよわせている。

例1：かいしゃの人は，はたらいているうちに，月のおわりごろ，げっきゅうをもらいます。こうばの人も，月のおわりごろにもらいます。てつどうの人もおんなじです。

例2：さらりいまんは，はたらいて月のおわりごろか，ちょっとまえにもらう。

② 「げっきゅうをもらう人のほかに，どういう人がいますか。」

a　1年同様，「みせ」ということばで表現できず，いろいろな商店を列挙するものが多い。19／91

b　しかも，「みせ」とその他のものとも区別せず，ほとんど思いつくまま，無秩序にら列している。12／91

例1：かしゅ，とうふや，さかなや，やきゅうのせんしゅ，とこや，パンや，もけいや，パーマや，たばこや。

そして，正答，誤答が混在している。

例1：こうばの人や，せとものやさんや，サーカスの人や，かなものやさんや，デパートの人もいて，ようふくやさんもいます。

例2：たいそうのせんしゅ，こっかいぎいん，てんもんだいの人，せんちょう，さかなやの

おじさん，じんじゃの人，おぼうさん。

c　「とこや」「だいく」など。21／91

d　「しゃちょう・ぶちょう」というような考えは，依然として多い。25／91　この次元で答えるものと，いろいろの商店を列挙するものとの間には，かなり判然とした傾向の違いがあり，前者には，商店などをあげるものがほとんどない。

e　「がっこうのせんせい」は1例に減る。

f　「家の中ではたらく」という面からのみ回答するものもある。3／91

例1：おてつだい，きものをぬう人，ふくをぬう人，あかちゃんをおもりする人。

g　「おかねをわたす人」「げっきゅうをやる人」といった，対照することばで答えるものもある。6／91

＜3年＞

①「げっきゅうをもらう人というのは，どういう人のことですか。」

正答が出はじめる。しかし，これは，3年の学習内容などから考えて，学習の成果というより，児童の生活経験などにもとづく自然発生的な発達と考えるべきであろう。11／94

例1：しごとにいって，はたらいて，いっか月たったらもらう人。

例2：会社ではたらいて，または，工場ではたらいて，1か月のきまった日にお金をもらう人。

②「げっきゅうをもらう人のほかに，どういう人がいますか。」

全般的に，その説明は，まとまった表現になり，ただ，いろいろな職業を列挙するということがなくなってくる。

例1：じぶんでくつやなどをしている人は，げっきゅうをやる人がいないし，人をあつかうほど大きなみせでないので，うちのかぞくがはたらいてくつがうれたらお金がもうかり，それでくらしている。

例2：つとめにいかないで，うちではたらいている人は，げっきゅうをもらいません。たとえば，やおやは，おかあさんたちがだいこんをかうときおかねをだしますね。そのおかねは，げっきゅうとおなじようなものです。

a　みせの人。24／94　いろいろの商店をら列するものは，もちろんあるが，「みせ」ということばを使ってまとめるものも目だちはじめる。

例1：うちがみせやの人は，げっきゅうはもらわない。

例2：うちで，おみせをだす人（やおやさん，パンやさん，さかなやさん，くつやさん）

b　「とこや」「だいく」など。8／94

c　職種が多面的になる。

例1：おみせをだしてしなものをうる人，ようふくやさん，のうかの人，だいくさん，しゃかんやさん（注・さかんやさん）

d　「日給」の例をあげるものがでてくる。つまり，給料の得かたの違いという次元で答えようとす

るものである。3／94

例1：こうじょうではたらいていて，その日その日とすこしずつもらう人もいるとおもう。

e 「いしゃ」が目につく。5／94

f 「のうか」は1例しかない。

＜4年＞

① 「げっきゅうをもらう人というのは，どういう人のことですか。」

「会社へ行ってはたらいて，そのはたらいたぶんだけお金をもらう人のこと」といった回答が多い。そして，「月に一度」という答えも，3年よりはるかに多くなる。24／110

例1：はたらいて，月にかならずきまったお金をもらう人。

例2：じぶんのつとめているかいしゃやおみせで，つきづききまったきんがくのおかねをもらう人のことをげっきゅうをもらう人ではないかと思います。

② 「げっきゅうをもらう人のほかに，どういう人がいますか。」

次第に密度の高い回答になってくる。

例1：自分の家をみせにしてはたらく人もいる。それから，そこの人のいちばんえらい人，つまり，しゃちょうさんは，はたらいた人からぜんぶおかねをとって，そのあとで，しゃちょうさんは，はたらいた人にげっきゅうをやる。自分ひとりでやさいをつくったり，こめをつくったりしている人もいます。

例2：ひゃくしょうをして，自分たちでお金を手に入れる。自分たちの店でお客がくると高くねだんをつけてかわせる。アパートをたてて，いっぱい人をはいらせて，やちんのお金をもらう。自動車をかしてお金をもうける。

a 商店を列挙することは，ほとんどなくなる。このことは，3年から4年にかけてが過渡期のようにも思われる。

b 「日きゅう」について述べているものは1例。

c 「のうか」などは，1，2，3年よりは多いが，それでも，わずか4，5例。

d 「いしゃ」と同時に，「先生・校長先生」をあげるものが再び目につく。7／110

例1：学校の先生，夜けい，大工，タクシーのうんてんしゅ，バスのうんてんしゅ，役所でつとめてはたらいている人。

例2：社長，おてつだいさんやこう長先生やでしやいろいろのことがあります。

例3：おいしゃさん，こう長先生（かな？），じぶんの家がおかしやで，じゅう業いんがいなくて，じぶんだけで売っている小売店。

e 前例にもみられるように，雇用するもの，雇用されるものの関係，あるいは，そのメカニズムといったものにも目が向き始める。5／110

例1：自分たちのおみせではたらいている人たちで，げっきゅうをやる人。

例2：げっきゅうをやる人（社長や店の主人）。自分ひとりでしょうばいをしている人。

＜5年＞

① 「げっきゅうをもらう人というのは，どういう人のことですか。」

「会社や店，工場，デパートなどにしごとをして，社長や店の主人からお金をもらう人たち」のように，給料を支払う者に着目する傾向が出てくる。そして，正答は，ますます増加する。30／105

例1：げっきゅうは，毎月決まった日に決まったねだんのお金をはたらいた人がもらっている。また，特別よく働いた人は，余分のお金をもらう。

例2：週きゅうや日きゅうとちがって，1か月にまとめてはたらいたお金をもらう人。

② 「げっきゅうをもらう人のほかに，どういう人がいますか。」

a　整った答え，また，商業，農業，漁魚など，多面的な面からの答えが目だつ。

例1：自分の家で商売をやり，物を売ったお金で生活している。農業をやり，できた作物を売ってそのお金で生活している。海や川で漁魚をやり，とった魚を売ったお金で生活している。会社の社長となり，はいったしゅうにゅうを働いた人に分けたりして，自分でもそのお金で生活している。ガレージなどをけいえいしている。

例2：商業で品物を売ってお金をもらってくらしている家がある（自分の家で）。農業で，米，野さいなどを協同組合に売って，その分，お金をもらってくらしている家。そのほかにも，（林業，漁魚）。

b　「日きゅう・週きゅう」のような，給料の得かたの次元で答えるものも目だつ。7／105

c　しかし，a，b両面から答えるものはない。まったくないわけではないが，正確に理解されていないので，整理しつくされていない。

例1：日に一どの日きゅうをもらう人がいる。スターやタレントなど，出えんしてギャラ（出えんりょう）をもらう人になる。ぎょぎょうやのうぎょうでとったものなどでお金をもらう人もある。

例2：そのみせをけいえいしている人（うりあげのお金は，みんなじぶんのものになる。）週にもらう人。1日にもらう人。ひやとい人ぶ（はたらいた日のぶんだけもらう。）1年にもらう。しごとがすむとお金をもらう人。しなものをうって自分のお金にする人。

d　雇用するもの，雇用されるものの関係に目を向けるものは，やはり多いが，そのメカニズムが，じゅうぶんに認識されているとは思われない。8／105

例1：つとめている人の社長さんが，つとめている人にげっきゅうをやるので，社長さんはそんをしているので，社長さんが，げっきゅうをもらわない。

例2：自分はもらわず，つとめの人たちにやったお金があまり，それが会社と自分のところにくる人。

例3：げっきゅうをくばる人，げっきゅうぶくろにお金をいれる人，会社についてしじをする人。

＜6年＞

① 「げっきゅうをもらう人というのは，どういう人のことですか。」

正答が，さらに増加する。54／118

例1：ほかの人の経営しているところへつとめて1か月に1回もらう賃金のこと。

例2：会社などへ毎日いって，1か月きちんとその会社のためにはたらいて，その会社が1か月のうちで何日かに月給というものをもらう日をきめて，その日に1か月間働いたかわりにお金をもらう。

② 「げっきゅうをもらう人のほかに，どういう人がいますか。」

a 「日きゅう・週きゅう」の次元からの答えが増加する。15／118

b 「けいえい」ということばもみえ出す。4／118

例1：商店などのように自分で経営している人。会社を自分で経営している人。

例2：自分がけいえいしているので，げっきゅうをもらわず，じっさいに自分のところにお金のはいる人。

しかし，この児童たちに，「けいえい」とはどういうことかを問うたら，どのように答えるであろうか。おとなのことばを使用しているということと，そのことばの意味内容をじゅうぶんに理解しているということとは別のことであることを忘れてはならない。

c 他の学年ではみられなかった特異な発想にもとづく認識がある。

例1：じぶんのもっているお金を銀行にあずけておいて，そのりしでくらしている人。どこかの会社のおおかぶぬし。うちでしょうばいをしている人。

例2：ものすごいたい金を銀行にあずけて一命をすごす人。どこかの会社のおおかぶぬし。天皇皇后両へいか。家でしょうばいをやってすごす人。ふだんは，のうかではたらいているが，冬にちかくなると出かせぎをやっている人。

d 誤答は，非常に少ない。

以上，学年を通して，その傾向をまとめて述べると，およそ次のようになる。

① 「げっきゅうをもらう人というのは，どういう人のことですか。」

a 1年では，ほとんど回答の要領を得ない。しかし，おぼろげながら，「つとめ」と「げっきゅう」の結びつきに気づいている。

b 2年では，「つとめ」て「げっきゅう」をもらうという関係が次第に明らかになる。

c 3年になると，月一度報酬を得るという考えが出てくる。そして，このことは，学年をおうにつれて，次第に増加し，6年では，約半数の児童に達する。

② 「げっきゅうをもらう人のほかに，どういう人がいますか。」

a 1年では，要領を得ない回答が多い。「げっきゅう」ということばの意味がわからないのであろう。しかし，①よりは正答が多い。いろいろの職業を列挙している。その中には，誤答も混在している場合が多い。「げっきゅうをもらう人」と「そのほかの人」とを確かに判別することができない。「せんせい」「うんてんしゅ」などをこのなかまとするものがある。

b　3年になると，ややまとまった説明ができるようになり，いろいろな商店や職業をら列することがなくなってくる。また，「日きゅう」のように，給料の得かたの面で，これをとらえようとする傾向も出てくる。

c　4年では，「のうか」などが，わずかながらあげられる。そして，1年のとき娯答としてみえていた「せんせい」などが，再び目につく。

d　5年では，商業，農業，漁魚などに従事するものが，ひろく取りあげられている。また，日給，週給など，給料の得かたの違いに着目するものも多くなる。しかし，これらの両面から答えるものは少ない。

e　6年では，それぞれの面で，ますます正答が増加する。

「げっきゅう」については，そのメカニズムといったものを理解させることは，もちろん期待すべきではないが，「どこかにつとめて」その報酬として「月一度，給料を得る」ことを理解させることは，それほどむずかしいことではないように思われる。この実態調査によるならば，1年で指導することは可能なことのように思われる。このとき，同時に，「にっきゅう」や「しゅうきゅう」や，そして，商業，農業，漁魚のように「きゅうりょう」以外の方法で所得を得ることも指導しておかなければならないことは，いうまでもない。

2　第2次調査の結果および考察

(1)　「かいしゃ」について

第1次調査の「つとめ」さらには「げっきゅう」の調査結果にみられるように，児童は，「かいしゃ」ということばを頻ぱんに用いている。教科書や指導計画，われわれの授業の中でも，このことばは，しばしば用いられている。それでは，児童は，この「かいしゃ」ということばの意味内容として，どのようなものをもっているかを，さらに確めてみたいと考えたのである。

＜1年＞

a　「はたらくばしょ・しごとをするところ」あるいは，「おとうさんがはたらくところ・おとうさんやおかあさんがはたらくところ」としているものが，約半数の児童である。「かいしゃ」すなわち「しごとをするところ」である。47／108

b　「かいしゃ」とは，「はたらく」こと，「しごと」のこととしているもの。9／108

c　「かいしゃ」を「はたらいている人」「つとめにいく人」としているもの。4／108　b，cは表現の不足とも考えられるので，aと同様にも考えることができよう。

d　「みんなではたらく」「あつまってはたらく」「大ぜいはたらいているところ」のように，「かいしゃ」のイメージの中に，大勢の人を思い浮かべているものがかなりある。13／108

e　その他

例1：ふつうの人がいってしごとをするところです。

例2：かいしゃはいそがしい。

例3：はたらいたり，うちのためにすること。

＜2年＞

2年では，1年に比べ，その回答例が多岐にわたり，整理分類することが困難なほどである。このことが一つの特色である。しいて分類すれば，次のようである。

a 「おとながしごとをするところ」としているもの。 34／90

b 「はたらいておかねをもらう」 15／90

c 仕事の内容といったものを指摘しているもの。 12／90

例1：字やえをかいたりするところ。

例2：おかねのけいさんやだいじなしょるいを書いたりしています。

d 会社の組織，機構などに目を向けているもの。6／90

例1：かいしゃは，しゃちょうとか，ぶちょうとか，かちょうとかがいて，たくさんではたらいています。しょるいやだいじなものをかいて，ほかのかいしゃといろいろはなしあう。

例2：いろいろの人がいる中には，えらそうな人もいる。いっしょうけんめいはたらくときゅうりょうがいっぱいもらえる。

e その他

例1：人びとのためにあります。

例2：たまに会ぎのあるところで，朝は，つうきんの人とおなじく，ひるはサラリーマンとおなじような人。

例3：大きいビル。

例4：おかねがたりないとき，かいしゃへいってボーナスをもらう。そのかわり，おしごとはむずかしくて，びょうきになるときもある。

そして，全体としては，次のような回答に代表されるといってよいのではなかろうか。「かいしゃはなにをしているのかしりません。かいしゃに人がなんにんくらいいるんだろうか。かいしゃには，でんわがたくさんあります。」

＜3年＞

a 「おとながしごとをしているところ」としているもの。 45／90

b 「はたらいておかねをもらう。」 6／90

c 仕事の内容を指摘しているもの。 9／90

例1：なにか，でんきとか，かみとかをつくってやってお金をもらう。

例2：たべものやしなものをつくってほかのみせにうっているところ。

d 会社の組織などについて。 2／90

e 「かいしゃ」――その建物，外見にとらわれているもの。これは，先の例のように，1，2年でも，一，二みられた。6／90

例1：大きなビルで，古町にいっぱいある。

例2：大きな，なにかみせみたいなところ。

例３：コンクリートでできていて，家からかいしゃ，かいしゃから家へというふうにいく。

f　その他

例１：いろいろなしごとをするところだが，こうばとはちがうとおもう。

例２：１８才から６３才まではたらけるところ。

例３：わかい人たちがはたらくばしょ。

例４：かいしゃにはいるときは，しけんをして，うかった人だけがかいしゃにはいれる。でも，おとうさんが，かいしゃのしゃちょうだったら，そのおとうさんのせがれは，おとうさんのあとつぎができる。

例５：大きくなったら，かいしゃへいってお金をもうけて，ごはんをたべたり，ようふくを買ってきたりする。

＜４年＞

a　「おとながはたらくところ」　46／110

b　報酬面について。23／110

c　仕事の内容から。12／110

例１：みんなのために，いろいろつくって売る。

例２：そこのかいしゃが，かみをつくっていたら，そのかみをつくって，そのかみをうってもうけている。

d　会社の組織，機構。4／110

例１：それぞれ，しゃちょうがつくってなまえをつけ，しゃいんをいれてできたのが会社だと思う。

例２：おかねをもうけるところで，しゃちょうがいて，めいれいする人がいるところです。

e　その他

例１：バスにのっていく人もいるし，汽車にのっていく人もいる。家からたいてい7時にでる人もいる。

例２：いやなことでもやることとか，たのまれたことをやる。

例３：そうだんにいったり，人がはたらきにきたり，いえをたててもらったりして，やくだてるものです。

＜５年＞

a　「おとながはたらくところ」　29／103　　4年まで，約$\frac{1}{2}$の児童が，この段階の回答にとどまっていたが，5年で急激に減少する。

b　報酬の面で。17／103　このことも，4年まで次第に増加してきたのであるが，5年で減少する。

c　「大勢の人が集まって働いているところ」というイメージが再びよみがえってくる。9／103

d　仕事の内容面に着目しているもの。19／103

例1：大きなそしきをもち，だいだいてきにせんでんをしたりして，たくさんの品物をうったりしている。

例2：物を作ったり，ぼうえきのしごとをしているところもある。とりひきをしているところもある。

例3：でんきがいしゃだとすると，テレビのポスターやせんでんをだすとか，お金をかせいだのをかぞえるしごと。

e　会社の組織などについて。9／103

例1：かい社では，やく所とちがい，社長，会長などと，それぞれ会社を作った人がなっている。

例2：いろいろな仕事をもっていくつかのかにわかれ，うけもちの仕事をやったりしている場所。一つのかに係長やか長がいて，そのかの中心になっている。そのほか，ぶちょうもいる。

f　その他

例1：父，母，姉，兄，おばなどが，おもにはたらきにいっているところで，ふつうは，工場やひやといをしているところとはちがって，しょるいや，ソロバン，カードなどのしごとをやっている。だから，物をせいさんしたり，どうろをなおしたりすることはしていない。

例2：たとえば，わかい人が働きにいって，ボーナス，また，げっきゅうなどをもらって，毎日働きに行く。

例3：自分の学力に応じた学校を卒業して，その実力をはっきするためのはたらくところ。

例4：会社は，はたらいて，みんなや会社，みんなのいのちをあずかることをしています。ぼくのおとうさんは，油と水のようなものをまぜていますが，へたしてこぼすと，ばくはつするおそれがある。

＜6年＞

a　「おとながはたらくところ」　この回答例は，5年よりさらに減少する。25／118

b　報酬。26／118

c　大勢の人が集まって働く。2／118

d　「人をやとって仕事をさせるところ」といった回答が目につく。8／118

e　仕事の内容面から。15／118

例1：日常生活にかかせない品物を作ったりするところ。

例2：なにかちがう会社ととりひきをしたり，働いたりして，お金をもらうところだと思います。

例3：大きな仕事場のような物（工場とは，食料の加工をしたり，紙をつくったりするような所）

f　会社の組織などの面で説明しょうとするものはかなり多い。17／118

例１：社長がおかねをだして，社員たちにきゅうりょうをはらっているところ。

例２：ある人物がけいえいしているおとなの人の働く場所で，ひじょうにきぼが大きくて，毎日９時から４時まではたらいて，１２時から１時まで休む。

g　その他

例１：働くところ。人がたてたたてもの（社長）。いろいろな課があって，そこで別々の仕事をしている。朝何時ごろまでに会社にくるときまっている。品物をうりかいするところ。しゃ員がいる。か長，ぶ長，せんむがいるところ。

例２：おとなの人たちのうち，たくさんの人たちがはたらいている１つの職場。やくしょなどとちがって，自分のためにものごとを行なっている。

例３：大きな組織をもって商売などをするところ。

例４：自分がはたらいているのだから，つぶれないようにはたらくところ。

以上を，さらに，全体としてみると，およそ次のようにまとめられる。

「かいしゃ」を，たんに，「おとながしごとをするところ」と認識している児童は，１年から４年まで，おのおのその約半数の児童であるが，５，６年では，約$\frac{1}{4}$の児童に減る。

そして，他方，報酬や仕事の内容や組織・機構などの面から「かいしゃ」を認識している児童が，学年をおって次第に増加する。

このような実態のまま，児童は，小学校を終了していく。「かいしゃ」ということが，直接学習の対象となることはないから，無理もないことであろう。しかも，小学校で「かいしゃ」をじゅうぶんに理解させようと努力したとしても，その発達段階などから考えて，とうてい及ぶべきことでもないと思われる。

しかし，実際には，前述のように，授業では，このことばが１年のときから，しきりに使われている。われわれは，この問題に対して，せいぜい，「かいしゃ」を「おとながしごとをするところ」の一つとして理解させ，「かいしゃ」を取り扱うときには，同時に，その他の職場もできるだけ数多く取りあげるように注意し，「おとながしごとをするところ」すなわち「かいしゃ」といった固定的な観念にとらわれないように配慮することしかほかに方法がないように思われるのである。

(2)　「げっきゅう」について

第１次調査で，児童の中には，「げっきゅう」ということばの意味がわからないために回答することができないものもあったように見受けられる。また，「つとめ」と「げっきゅう」を結びつけている児童があるが，「げっきゅう」をどのように理解しているのか明らかにしてみる必要もある。

第１次調査と重複するが，いまいちど，このことを調査してみることにした。特に，「月に一度」給料を得るという点に重点をおいて回答を整理すると，次のようになる。

＜１年＞

a　正答。3／108

b 「はたらいておかねをもらう」「はたらいた人がもらうおかね」などとしているもの。36／108

c 「げっきゅう」とは「おかね」のこととしているもの。17／108

d 「おかねをもらうところ」「おかねをやる」「おかねをもらう人」「おかねをもらうひ」「おかねをしらべる」「おかねをかりる人」など，どこかに，いくらか誤りのあるもの。

e その他

例1：よくしごとをしている人にしょうじょうやおかねをやる。

例2：おこづかいをおかあさんからもらわない。

例3：げっきゅうは，うちのひとをよろこばせるためです。

例4：ボーナスとおなじものとおもいます。

f 回答なし。26／108

＜2年＞

a 正答。20／90

b 「はたらいておかねをもらう」など。22／90

c 「おかねをもらうところ」「おかねをくれる」「くらしのおかね」「げっきゅうび」など。

d 「かいしゃ」に関連した答。14／90

例1：はたらいてかいしゃでもらうお金。

例2：かいしゃやサラリーマンをしておかねをもらう。

例3：こん月げんきにかいしゃにきてくれというお金。

e その他

例1：げっきゅうは，はたらけばどんどんあがる。

例2：なにかをかったときお金からひいたおかね。

例3：げっきゅうってきゅうりょうとおなじだとおもいます。げっきゅうは，いいことだとおもいます。

例4：ねあがり。

f 回答なし。11／90

＜3年＞

a 正答 31／90

b 「はたらいておかねをもらう」など。26／90

c 「お金をやる」「しごとをしたぶんのおかね」「たいていもらっているおかね」など。

d 「かいしゃ」に関連したもの。15／90

例1：会社でくれるお金。

例2：かいしゃではたらいて，そのかいしゃのしゃちょうがお金をくれること。

例3：はたらいている人から1か月に1べんげっきゅうをもらって会社につくえをかったりする。

e　その他

例１：ふくろにはいったお金。

例２：きゅうりょうとおなじ。げっきゅうともきゅうりょうともいう。

例３：はたらいたお金からひかれるお金。

例４：２５日くらいたったら，よくはたらいた人にはちょっといっぱいあげるかもしれないけれど，みんなおなじくらいにお金をあげる。

f　回答なし　0／90

＜4年＞

a　正答　35／110

b　「会社から」まい月もらうお金。11／110

c　「はたらいておかねをもらう。」13／110

d　「月一ぺんのお金がもらえる日」「お金をもらうこと」

e　会社に関連した答。26／110

例１：会社でお金がたまったからやる。

例２：会社につとめている人がたくさんはたらくとたくさんもらわれるお金のこと。

f　その他

例１：１年に１度のはたらいてもらうお金。

例２：その日その日のしごとをやっているお金をやる。

例３：１か月か２か月まとめてお金をもらうこと。

g　回答なし　2／110

＜5年＞

a　正答　67／103

b　「会社から」まい月もらうお金。17／103

c　「はたらいてお金をもらう。」11／103

d　会社に関連した答。2／103

e　その他

例１：１年間に２へんぐらい，はたらいたぶんだけもらう。

例２：ボーナスとにていて，3か月ぐらいおきにつとめた人にお金をやる。

例３：その人がいっしょうけんめいやったから，きゅうりょうよりもお金がもらえる。

f　回答なし　0／103

＜6年＞

a　正答　92／118

b　「会社から」まい月もらうお金。13／118

c　「はたらいてお金をもらう。」10／118

d　会社に関連した答。2／118

e　その他

例１：半年ごとにもらうお金。

例２：かい社で５か月はたらいてもらうはたらいたおれいのお金。

例３：一日はたらくとその日その日にお金をもらう人。

f　回答なし　0／118

学年を通してその傾向をみると，次のようになる。

a　正答は，５年で飛躍的に増加し，６年では，大半に及ぶ。「会社から」まい月もらうお金のことという答えも入れるならば，６年のほとんど全児童が正答しているといえる。

b　働いてもらうお金，つまり報酬を「げっきゅう」としているものは，学年が進むにつれて減少する。

c　「かいしゃ」と「げっきゅう」の密接な結びつきについては，すでに，第１次調査，あるいは，第２次調査の「かいしゃ」で明らかであるが，「かいしゃ」と関連させた答は，５，６年では，ほとんど姿を消す。

第１次調査の「げっきゅうをもらう人」「そのほかの人」でも述べたように，これらの調査結果からみて，「げっきゅう」を１年から教えることはむずかしいことではないように思われる。「つとめにいく人」が「はたらいてもらうおかね」という理解の上に，「月ごと」にもらう「きゅうりょう」という字義的な定義を，「日きゅう」や「週きゅう」などと対比させて指導することによって，その効果を期待することができると思う。

ことばは，かならずしも完全な意味内容をともなって使用されるものではない。極論するならば，児童のことばは，つねに不完全なものであるといえる。ヴイゴッキーのいう複合的なもの，擬概念的なものなど，いろいろの水準で使用されている。われわれは，どの水準で使用されているものであるかを実態調査などでは握しておかなければならない。そして，たとえば，「げっきゅう」ということばが，あらためて，ある一つの体系をもって直接学習の対象として児童の前に提出されるとき，これらの低い水準の実態との間に，どのような隔差があるか，その隔差をどのような教育的操作でうめることができるかを問題にしなければならない。このような教育的操作は，完全な意味内容のは握にいたるまで，いくどとなく繰り返し行なわれるものである。

あ　と　が　き

本稿の終わりに当って，次のことがらを書きとどめておきたい。

ア．このような児童の実態を，指導にどう生かしたらよいか，指導内容やその系統をどのように改善し，構成したらよいか，さらに，改善した後の指導においては，児童の認識がどのように変わったかなど当然研究を進めていかなければならない数々の問題が残されているが，いろいろの事情のため，ここでは，故意に，このような実態調査にとどめたのである。

イ．このような調査，発問で，児童の認識の全ぼうをうかがうことができるなどとは考えていない。いま少し，くふうがあってしかるべきではないかとも思う。しかし，一面の真実の姿はみることができ

たのではないかと思っている。

ウ．この調査は，新潟市の一小学校の児童を対象にしたに過ぎないので，このことから，何か断定的なことをいうことは避けなければならないことと思っている。同じ新潟市でも，他のいくつかの学校で調査をしたり，さらには，農村，漁村などの学校で調査をすれば，おのずから異なった結果があらわれてくるものと思われる。

エ．このように，限られた，ささやかな資料なので，回答のいろいろの傾向性についても，できるだけ調査結果にもとづいて事実を述べるにとどめ，なぜ，そのような傾向があらわれているかなどの原因の推察などには立ち入らないように，意識的にひかえた。そのため，物足りなく感じられる箇所も多くあったことと思う。それでも，いくらか立ち入った考察に過ぎたのではないかと反省している部分がある。

オ．われわれは，つねずね，児童の実態を重視するとか，児童の実態に即した指導とか，児童の認識のあやまりをつきくずすような指導とかいうことをしきりに口にするが，このような調査を通して，われわれが，いかに，児童の認識の実態を知らないでいるかを痛切に感じるのである。

カ．われわれは，ふだんのテストなどでは，多く，選択肢を用いているので，このような自由記述をさせてみると，児童間の認識や理解に，いかに大きな隔差があるかをあらためて知らされ，驚くのである。選択肢を用いたテストなどでは，その性質上，あまり大きな認識や理解の差異があらわれない。社会科では，個人差に応じた指導などということは，あまり大きく論じられない。しかし，このような実態をみたりすると，この問題にどのように対処していったらよいのか，そこには，非常にむずかしい問題があるように思うが，見捨てておくわけにはいかないという気がするのである。

キ．それぞれの調査の整理には，かなり無理な分類を行なった。引用しておいた回答例にもみられるように，児童の認識は，非常に多岐にわたり，また，あいまいな点を多く含んでいる。そして，それらのわずかなあいまいさでも，さらに深く立ち入って究明するならば，どのように大きな相異となってあらわれるものであるか，計り知れないものがあると思われるのである。

ク．これらの回答をみると，その正答は，ほとんど，学年をおって段階的に上昇していくようである。このことは，ことばをかえていえば，自然発生的な増加ともいえる。学年の発展的な段階というものは，あまり顕著にあらわれない。このことから，社会科教育の効果といったことについて，いくらかの疑問を持たざるを得なくなるのである。（もっとも，このたびの調査の項目には，「げっきゅう」などのように，直接指導内容として取りあげられていないものもあったが。）社会科は，他の教科に比べても，学習の定着，学習のつみかさねという点で著しく劣るのではなかろうか，そのことに対する手だてがあまいのではなかろうかということを反省させられる。

ケ．現在の社会科の指導内容は，あまり縦の系統ということが考えられていないから，たとえば，「つとめ」とか，「げっきゅう」とかについて，その系統的な指導を行ない，上述のような不足を補うということは，いまの段階では，かなりむずかしいことになってくる。しかし，このような実態をみると，かって問題になったような，社会の科学的な認識とか，社会科学的な認識ということを，あらためて問題にし，社会認識の系統性といったことを究明しなければならないと感じるのである。

この調査研究に当たっては，新潟市内のA校に全面的なご協力をいただいた。校長先生はじめ諸先生がたにこころから感謝の意を表したい。なお，この調査研究を担当し執筆したのは，本間道夫である。

参考文献

山元一郎　「コトバの哲学」　岩波書店
小口忠彦　「創造力の心理 ― 学習心理学の立場」　牧書店
吉田　昇　「学習と指導 ― 教育方法の基本原理」　世界社
ヴイゴッキー著　柴田義松訳　「思考と言語」　明治図書
ホワットモー著　蛭沼寿雄　久野暐訳　「言語 ― 現代における綜合的考察」　岩波書店
ルビンシュティン著　石田幸平訳　「思考心理学」　明治図書
ピエール・ギロー著　佐藤信夫訳　「意味論」　文庫クセジュ　白水社
天野　清　「意味とシンボル」　講座・現代思考心理学１　明治図書
滝沢武久　「言語と思考」　講座・現代思考心理学１　明治図書
春日　喬　「概念達成と集団過程」　講座・現代思考心理学２　明治図書
清水御代明　「言語を通じての概念形成」　講座・現代思考心理学３　明治図書
全国教育研究所連盟編　「社会科と社会認識の形成・その指導Ⅰ」　教育研究所協会
東京都世田谷区尾山台小学校　「社会科における基礎的概念の指導について」　研究紀要
重松鷹泰　「社会的意識の発達」　依田新編　児童発達　国土社
松本金寿　「学童における言語の内容的側面」　依田新編　児童発達　国土社
天野　清　「労働概念の発達」　日本教育心理学会第７回総会発表論文集
天野　清　「社会認識のための基本的概念はどう発達するか」　社会科教育No.１４　明治図書
辰野千寿　「知的機能の位置づけ」　指導と評価Vol. １―１３　日本教育評価研究会